山崎郷土研究会報

NO.96
12.9.1

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62－2000

江戸時代の町・郷の行政の仕組

堀口春夫

江戸時代藩の領地内は、町方と郷方（さと）とに分けて、それぞれの役人を住民の中から選んで、町役人・村役人と言った。町方ではまず大年寄三人衆と言った大店の主人で、店を番頭にまかせておいても差し支えない経済的余裕のある筋目の三人衆が選ばれた。毎日、町会所へ出席して住民の民事相談に応じた（当時町会所は本町西の元役場のあった所にあった）。また藩では町奉行二人を用人級の上士の中から選び、月番交替で民政を監督した。奉行には取次同心二人と定廻り同心を七～八人を配下において、町や番所を巡廻した。大年寄の会所での民事の相談は大方が銀出入という金銭貸借の争い事で、たまには家出人や夫婦間の争いもあった。大方は町年寄りの仲裁で裁決して町奉行の認可を得ていた。犯罪による刑事裁判は、奉行の役宅で裁判され、屋敷の玄関前が白州となり、玄関の間の正面に奉行が着座し、その側に与力吟味役が机を置いて聞き書を筆記した。白州には二人の取次同心が床几に腰をかけた。何れも江戸幕府の町奉行所の模倣であったようである。

また小字の各町では、多少有力な商人が一人ずつ年寄役に選ばれ、その下に約十軒くらいの区分で組頭がいた。現代に例えると年寄は自治会長である。組頭は隣保長に当たる。そのほか「月行事（がちぎょうじ）」と称する月当番があって、町会所よりの触れ事や文箱を持って告げて廻ったり配布事をして歩いたので「歩行業事（かちぎょうじ）」とも言った。

目次

①江戸時代の町・郷の行政の仕組　堀口春夫　1
②エッセイ　千早赤坂村　浅田耕三　3
③国見山と金谷について　片山昭悟　9
④上比地岩田神社の神宝について　12
⑤生谷西垣内遺跡の発掘調査について　山崎町教育委員会　15
⑥寺内町散策と金剛山登山　岸本正理　18
⑦神谷村古文書の紹介　史跡部　19

今の月隣番である。月行事は領内に火災が発生した時は、各町の町名を書いた高張提灯を五メートル程の竹竿の先に付けてかついで行き、火事場の近くにずらりと並べて近火見舞いの挨拶の印にしたものである。これらの仕来たりは昭和の初め頃まで続いていた。

郷方では数ヶ村を合わせ分けて高下組、城下組、出石組と分けて大庄屋三人が選ばれていた。やはり筋目の豪農が世襲的に選ばれていたようである。大庄屋の下には各村に庄屋があり、本百姓（自作農）の中から選ばれていた。また、その下に五人組の組頭（五長）があった。これ等を村役人と称し何れも五人組の組員は、自作農・本百姓であった。幕府が五人組制を取り極めたのは江戸中期寛政頃の事で、年貢の上納に責任を持たす為であった。また倹約令の厳しい条例を作り取り締まらせたものである。年貢の納まりが悪い時は「村弁ひ」という責任まで持たせたのである。そのほか、小作農は小前百姓と言って村の政治には参与できなかった。また藩では、郷方に対し代官と称す「郡奉行」二人を定め、年二回、春廻り、秋廻りと、大庄屋を初め村役人と一緒に村中を巡り、農地の作付状況を調べてまわり、庄屋の役宅において村役人達と合議の上年貢の高を決めたのである。これらを検見法といって毎年行われるのが普通であった。また代官は、村の争い事、願い事等は庄屋、大庄屋を通してこれを受け裁決したが、これも大方は大庄屋の仲介で相談によりうまく治めたという。年貢の高の取り決めは江戸時代初期徳川家康は「百姓は国の宝、生かすべからず殺すべからず」と言って、身分を士農工商の二番目の階級に置いた。生産者である百姓を尊重したが、一方では百姓を余り甘やかし過ぎても良くないと、生かさず殺さず、上手に使えと言う意味で、年貢の高は四公六民が理想であるが、災害で不作の時は五公五民の折半にするのもまたしかりと、側近の本多佐渡守に言ったという。しかし幕府は三代将軍家光の頃から華美の生活によって次第に財政は逼迫していった。従って、年貢も五公五民が普通となってきた。さらに元禄期頃より貨幣経済が発達すると共に物価は暫次騰貴していき、非生産者である武士の生活は苦しくなってきた。諸藩は参勤交代の制度により江戸と国元との二重生活に財政は逼迫し、参勤の道中費用も嵩んで行き、藩の財政は困窮の一途をたどっていった。領地の田畑は固定しているし産物も一定していたので農民と武士の生活は困窮する一方であった。幕府は貨幣改鋳をしたり、倹約令を厳しく取り締まるようになったが物価の高騰には追いつかず、段々年貢の高も大きくなって江

きれいなカラープリントの店
Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
本店　宍粟郡山崎町東鹿沢 26-3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120－440－990
FAX 0790－62－7429
咲ランド店　TEL 0790－63－0533

戸中期以後は各藩共に六公四民が普通のようになっていった。藩の財政が窮貧してくると、藩士の給米も減給され、上級の武士は半知半知と繰り返しなされ、下級武士も一～二割の減給は普通となった。農民も不作の年は検見法では藩の財政が保てないので、定免法という非常手段が強行され、年貢は今迄の平均高をもって過酷な取り立てとなった。五人組制によって倹約令は厳しく取り締まられ、農民の中には田畑を質に入れ商人に借財しなければならなくなり、農地の売買は前々から禁止されていたが、商家の小作人に転落していく者も次第に増えてきた。また、藩は商人に対しても藩の財政が保てなくなると地子銭のほかに調達借上という借財を強制的に行った。つまり調達金を割り当てて町役人に負担させたのである。しかし商人の方は比較的余裕があった。貨幣経済の発達は、非生産者である武士や藩の消費者階級の金銀が自然と商人のふところに流れ込むような仕組みになっていたからである。農民の借金返済も小作料として米で商人に利息がらみで流れ込んでいたし、中には調達金も「永納」といって奇篤の恩償に名字帯刀御免という代償を受け、筋目の商人に成り上がった者もかなりあったようである。この時代の特色として武士も農民も商人には頭の上がらぬ時代であった。大阪の豪商人の中には、大名貸という銀主になって、多少は踏み倒される危険性はあっても、年々産出される年貢米を担保に取っているから藩が潰れない限り大儲けをしたものである。

エッセイ
千早赤坂村

浅田耕三

五月二十一日、町の郷土研究会恒例の春の日帰り旅行があって参加した。

午前十時、富田林市の寺内町西方村に到着、城之門筋を見学し、河内長野の龍泉寺近くで昼食のあと、千早赤坂村にむかい、金剛山に登った。

バスを下りて急坂をケーブルカーの駅へ歩きながら、まわりの山々の険阻な様相に目を見張る。ケーブルカーの窓から見るといよいよその感はふかく、谷はあくまで深く狭く、まるで杉の穂先のような山巓が天に向かって屹立している。

一緒に町の老人大学で俳句をやっているKさんと話をしながら窓外を眺めた。

「なるほど、これじゃ、たたかう前から楠木正成の戦略勝ちやなあ」

「うん、こんな山の中へヤアヤアトオカランモノハと名乗り合い、関東平野を馬で駆け回り鎌倉刀とよぶ長刀で馬上に斬り結んでいた鎌倉武士をおびきよせたんやからなあ、大した知恵者じゃ、楠公さんは」と、歴史好きのKさん。

「しかも一騎当千のその関東武士が不慣れな山の中でうろうろしているところを、物陰からとび出した集団の河内兵が素槍一本で、よってたかって斃す足軽戦法」

「さぞ相手は面くろうたやろうな。けどそんな戦法を思いついたのはやっぱり河内の土豪の発想やろかなあ」

「どうでしょう。『峯相記』にいう播磨の悪党赤松円心も、千早城の攻囲をやめて播磨へ帰り、六波羅に叛旗をひるがえすと、同じような戦法で敵を悩ましていますね。円心入道が正成をマネたか、それとも河内と播磨の悪党どうし、共通したいくさのやり方を本能的に会得していたかねえ」

「多分、あとの方やろな」

駅を出て展望台へ歩く。八十を過ぎても至極元気なKさんは植物にもくわしく、話の合間にこれはチゴユリ、これはフタリシズカなどと説明して下さる。

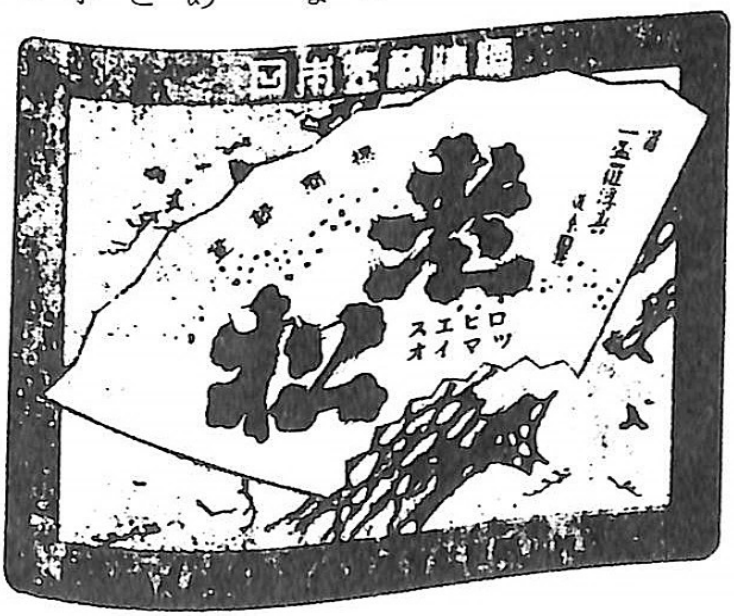
金剛山を下りてから大阪の近つ飛鳥博物館に寄り、六時半に帰着した。帰ってからあらためて赤坂、千早城の史料を読み返してみた。

『太平記』は、赤坂城へ攻め寄せた六波羅軍は三十万と記す。が、太平記の数字はたいてい誇張があるから大分割引かねばならない。大体四、五万だったろうと推量している作家もいるし、三万ぐらいと見ている歴史家もいるがそれにしても大軍だ。

押し寄せた関八州のその大軍が赤坂城を見て、

「なんや、これは。ああ、せめて一日持ちこたえてくれんことには、わしら、手柄の立てようがないやないか」

播州弁で言うならそういって嘆き、無雑作に馬を飛びおり空濠を渡っててんでに塀にとりついた所、城内の櫓、狭間の物陰から雨あられと矢が飛んできて寄手はたちまち手負千人。千人というのは例によって太平記流のちと大げさな数だろうが、それでもとにかく多数の負傷者を出した。度胆を抜かれた寄手は大将の命令で一たん退却し、ゆっくり戦術を練ることにして後方に陣地をかまえた。



しかし、遠くから眺めるとやっぱり小城だ。こんな吹けば飛ぶような小城ひとつ、その気になれ

ばいつでも落とせるわいと、物具脱いで一息入れ汗をふいていると、東西両側の山から三百人程の兵が、ひどく物静かに笑顔さえうかべて下りてくる。

あんなに落ち着いているんだから味方にちがいない、と寄手は思った。それにしてもどこから湧いてきたんだろうと、首をかしげて眺めていると、すぐ近くまでくるやさっと菊水の旗をあげたと思うとトキの声もろとも斬り込んできた。同時に城の木戸が開き、二百の城兵が一斉に襲いかかる。関東勢はあわてふためき、われ先に石川河原まで遁走し、付近の農民はその遺棄した刀、槍、鎧、馬までひろって大もうけした、と太平記は書く。農民はちゃんと楠木軍としめし合わせていたのだ。

しかし何しろ天下最強の鎌倉武士だ。プライドもある。勇猛無類、父、兄が討たれたら上方武士は泣く泣く国へ帰り、二十日間も喪に服して家にこもるけれど、鎌倉武士はその父や兄の屍を踏みつけて進撃し敵を殲滅する、と『平家物語』の作者をして嗟嘆せしめ、京童が「荒夷」と呼んで怖れた連中だ。

コーヒーハウス
らふ
山崎文化会館西
☎62−8559

こうまでバカにされては何の面目あって郷国に帰れよう、この上はいさぎよくたたかい華々しく討死せんまで、と悲壮な覚悟で遮二無二城に迫り塀をよじのぼった。が、城内は静かで何の反応もない。やはり田舎武士、われらの勢いに怖れをなして早くも逃げ失せたかと、びっしりと蟻が菓子にたかるように塀にとりついたところがこれが何と二重になった吊り塀、城内では頃やよしと吊り網を一斉に切ったから寄手の兵は吊り塀もろとも空濠の底へころがり落ちた。そこへ上から石、丸太ん棒がごろごろ落ちてきて又もや寄手は惨敗、多数の死傷者を出した。

こんな奇策と足軽戦法で楠木軍は、さんざん関東勢を悩ませたが、いかんせん味方は五、六百、敵は数万、たたかい疲れて赤坂城もついに落城。太平記には二十日余りの攻防だったとあるが、歴史家の研究によると実際は四、五日だったらしい。

城に火をかけて退去する際、正成は自分が死んだように見せかけ、家来達にもそう噂させた。

寄手が安心して六波羅へ帰ると、一年後正成は再挙し、今度は千早城を築き、相も変わらず奇手奇略を用いて幕府軍を痛めつける。元弘三年（一三三三）正月の天王寺、渡辺合戦である。だが閏二月一日、上赤坂に再興していた赤坂城が落城。太平記は水の手を切られたためとするが、攻めた幕府軍は七日間で千八百人もの戦死者を出している。

そしてこの年の正月には吉野も落ち、護良親王は高野へ逃れた

ため、六波羅の幕府軍は大挙して正成のこもる千早城へ攻めかかった。

ここで正成はいよいよ本領発揮、縦横の知略戦法で閏二月七、八から五月八、九日まで約九十日間、天下の大軍を相手に善戦力闘、孤塁を守りきった。

われわれの年代から上の者はどなたも小学校時代、歴史の時間にこの時の正成の戦法を先生からきいたり読んだりした経験がおありだろうがそのおもしろかった記憶は私には今も鮮明にのこっている。歴史といわずにその頃は「国史」といっていたがその国史なるものはとにかくおもしろかった。学校で習う歴史がつまらなくなったのは、戦後の「日本の歴史」からである。

私の子どもが中学生の頃、自室の壁に大きな長い日本史年表を貼って高校受験に備えて年代を暗記しているのを見て私は可哀相に思った経験がある。受験のためには仕方がないのかも知れぬが年表の暗記など歴史嫌いを養成するようなものだ。

閑話休題、千早城攻防の様子は『梅松論』にも、

「去春より楠兵衛正成が金剛山の城を囲みし関東の大勢、一戦も功をなさず利を失ふ」

とあるし、太平記には、

「この城、東西に谷深く切れて人の上るべきやうもなし。南北は金剛山につづきて、しかも峯そばだちたり。されども高さ二町（一町ー百九メートル）ばかりにてまわり一里に足らぬ小城」

と、その規模をしるす。千早村の奥ふかく、山は四段の平地が作られ四の丸、三の丸、二の丸、本丸となっていた。

こうして九十日間の千早城攻防の間に、後醍醐天皇は隠岐を脱出、名和長年らに供奉されて船上山から各地の武士に綸旨（りんし）を送られた。

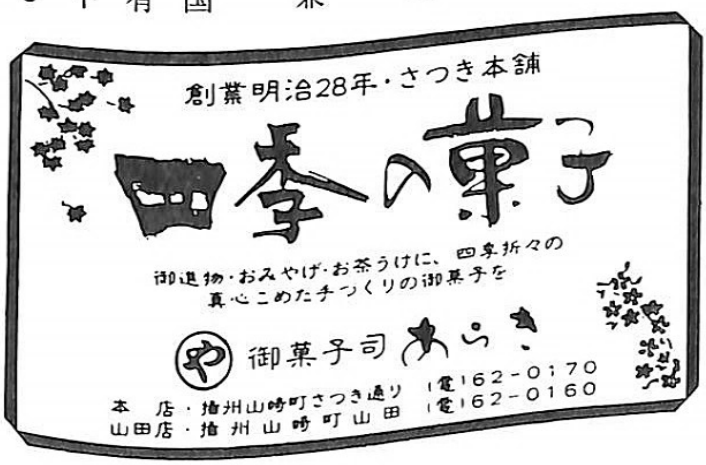
播州の赤松円心が天皇方についたのは早く、千早城の攻防がはじまった頃で、円心の三男則祐が大塔宮護良親王と親しく、その例旨を頂き、西宮や京都の周辺で赤松軍は六波羅軍とたたかい勝利をおさめた。

姫路独協大学の「播磨学」の講義集「風は悪党の背に」の中で原弘平という郷土史家の先生がそのたたかいぶりを書いておられるが前述したようにそれが楠木軍と似た戦法だった。

こうして天下の至る所で反幕勢力が烽起し執権北条高時は自殺、ついに北条氏は亡んだ。

王政は復古し、建武政権が誕生した。

正成は検非違使、左衛門少尉兼河内守と摂津守、従五位下を賜わった。しかし国守といっても国衛（国有地）は僅かで荘園（私有地）の方がはるかに多く、平安中期の国守の権力や財力とは比べも



のにならぬ程小さかった。

そして正成の栄光はそこまでだった。

建武政権はたちまち矛盾を露呈した。

何しろ政治など全く不慣れで経験のない公伯卿が三権を一手にしたのだ。亡んだ北条氏の所有していた広大な荘園は自分たちで分け合い、残りを女官や気に入りの芸人などに与え、裁判は不公平、出鱈目で、政令は文字通り朝に令して夕に変わる。

二年三ヶ月で足利尊氏が叛乱すると、王政に失望し、こんなはずではなかった、もう一度武家政権の世にもどれかしと願っていた武士団はわれもわれもと南朝に背を向けた。

赤松円心にしても播磨の守護職をとり上げられ佐用庄の地頭職に落とされたのだ。護良親王と親しかったのが帝のお気に召さなかったのだが、建武政権の成立に大功をたてていても、好悪の感情でこんな扱いを受けては立つ瀬もなかったのだろう。尊氏側へ心をかたむけてしまった。こんな例はいくつもある。

しかし朝廷に背いて鎌倉から京に攻め上った尊氏軍は北畠顕家の率いる東北の大軍と正成得意の知略戦に遭遇し激戦半月の後敗北して九州へ走った。

だが三ヶ月後、九州で力を盛り返した尊氏は大軍を率いて水陸両軍で再び京へ攻めのぼってくる。弟の直義は陸軍、尊氏は水軍をひきい、その勢は太平記は陸軍五十万、水軍七千五百艘と記す。梅松論は水軍五千艘としているが、いずれにしても未曽有の大軍だったろう。

楠木正成という人は日本史上、稀に見る清廉高潔の人物であると私はかねがね思っている。戦前の皇国史観に基づいた国定教科書が正成を激賞しているのは論外として、また、その思想信条に対する批判は別として、とにかく正成の人物を評して悪く論述したものには、私はかつて一度もお目にかかったことがない。その心事のさわやかさにおいて、正成の他に日本史上に人物を挙げるとすれば私は乃木希典と西郷南州であろうと思っている。

さて、尊氏、直義の大軍が攻め上るときいて京の朝廷はふるえあがった。

いそぎ正成を召して防ぎようと尋ねられた。

「畏れながら主上には叡山へ行幸ねがい、足利軍を京へ入れ、義貞殿と私の兵をもって京の東と西の出口、瀬田と淀を固めれば大軍はやがて食糧にも事を欠き、そうなれば足利軍は所詮寄せ集めの烏合の衆ゆえ、散り散りとなって退散しましょう」

そう献策したが、たたかい方などズブの素人の坊門宰相清忠なる公卿がこの時しゃしゃり出て正成の策に反対した。

呉服とジュエリー

とくさや

本店　本町（さつき通り）62-1680

咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

その論の主旨が、およそ公卿というものの現実対応の鈍さ、感覚のズレを現していて余す所がない。

「三ヶ月前、わが勤皇方が尊氏に大勝したのは武将たちの勇武のせいにあらずしてそれはひとえに主上の御稜威（ご威光）によるもの、すなわち、天が正義に味方したのである。よって今度も勤皇方が勝つに違いない。主上に再び叡山へ行幸ねがうなどもってのほか」

こうして正成の策は退けられ「急ぎ兵庫に下り、義貞と力を合わせ敵を迎え討て」という命を受ける。

宰相というのは参議の唐名である。朝政に参画する太政官の職で大、中納言に次ぐ地位。「公卿（上達部）」のうち「卿」に入る高級官僚でふだん何かにつけて発言する人物だったらしいが、後醍醐帝も賛同されたのであろう。

正成はもはや一言も反論せず、畏って御座所を退出したがこの時討死の覚悟を決めたといわれる。英雄の心情以って掬すべく、私は久し振りに太平記のこの場面を読み返してみたがこの齢になってもやはりじーんと目の奥に痛みをおぼえる。「今はこれまで」と一言呟いた、といわれる正成の言葉は、西南の役に敗れた西郷隆盛が城山で最後を遂げる時、「晋どん、もうこのへんでよか」といい、端然と路上に坐し、別府晋介に介錯を促した言葉と共通するものであろうと、植田滋氏がその著『太平記の超人たち』の中で書いておられるが、同感である。

湊川に赴くにあたって正成は桜井の駅で一子正行と別れる。この子別れの伝説は太平記の創作だという節が戦後増えたそうだが、もし創作とすれば、太平記の作者は何と見事なロマンをつくった事だろう。名文だ。人の心をとらえてやまない。そのせいか、歴史家や作家にはこれを事実と見る人が多い。あるいは、事実と見たい願望がひとしくその胸にあるのかも知れない。

湊川決戦の前夜、正成は義貞の陣を訪ね、二人で酒を酌みかわしみじみ語り合ったという。すでに死を覚悟している正成は、義貞がこれ程数々の負けいくさに気落ちしてるのを、言葉を尽くして慰めたといわれる。

明くれば延元元年（建武三）五月二十五日。正成は僅か七百の兵を率いて湊川西岸に陣した。

尊氏の水軍が和田岬に上陸すると見込んで義貞は陸で待ち構えたが水軍の先鋒細川定禅の船団はそれを横目に見て通り過ぎ紺辺（神戸）に上陸する気配を見せた。この戦法にまんまと欺かれた義貞軍一万は慌てて東へ移動した。義貞は武将としては真正直過ぎて失敗し

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL⑥②0036

ている例が多い。九州の尊氏追討に出た時も播州上郡の白旗城にこもる円心にころりとだまされて日を無駄に過ごし、その間に尊氏は九州で勢いを盛り返している。さて、尊氏軍本隊はガラ空きの和田岬に悠々上陸、正成軍は大軍の中に孤立した。しかし勇戦奮闘、午前十時に始まったいくさは六時間に及び、十六度突撃をくり返した楠木軍七百騎は最後は七十三騎となり、疲れ果てて民家に入り一族十三人、郎党六十人自害して果てた。午後四時であった。

尊氏は正成の首を実検し、その家族の元へ丁重に送り届けた。正成の死を最も惜しんだ一人は尊氏だったかもしれない。彼は正成が好きで深く尊敬していたといわれる。

梅松論は作者不明だが足利氏が天下を掌握する迄を描いた、足利氏の史観に立った書物。つまり南朝側の太平記とは正反対の足利方の著したものだが、正成については賢才武略の達人としてほめたたえている。

『続本朝通鑑』という江戸時代前期の史書によると、一たん東方へ敗走していた義貞軍は正成が敵の重囲に陥ったと知ると、死物狂いにひき返して正成を助けようとした。義貞も純粋で情のある武将ではあったのだ。無能で頑迷で自己保身と特権意識しかなかった公卿とは違っていたのである。

国見山と金谷について

片山昭悟

一、はじめに

私の住む山崎町金谷からみる国見山は美しい自然環境に恵まれた山である。この国見山は、約十年前頃の平成になって兵庫県開発公社により、金谷の山のほか頂上付近一帯が買収されることになった。現在、この国見山をどう活用していくか基本計画が策定されている。

私は、金谷に生まれおりにふれ国見山をみてきた。私はふるさとの記録を書きとどめたいとの思いからこれまで東京国立博物館、文化庁、奈良国立文化財研究所、宮内庁正倉院事務所はじめ全国の多くの方々に御世話になって拙著の『金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡』・『奈良時代の鏡研究　兵庫県宍粟郡山崎町金谷出土瑞雲双鸞八花鏡のルーツをもとめて』・『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』などを上梓する機会に恵まれた。

今回、国見山と金谷について概略をまとめる。

二、国見山について

国見山は、眺める位置から姿がかわることが大きな特徴である。金谷から見た国見山や段から見た国見山、上比地から見た国見山、御名から見た国見山、川戸山から見た国見山、また、河東の須賀の峠から見た国見山、山崎の最上山から見た国見山などいろんな

姿をしているようである。

国見山は山崎町金谷の小字名である。段や上比地には見られない字名である。

国見山（くにみやま）の地名の由来は、ふつうの国が見える山である。国見山一帯を総じていわれるが、金谷や段からみて標高四六八メートルのところが国見山と呼ばれているようである。

頂上からは、町内が一望でき、晴れた日には姫路市網干区の海がみえる。

上比地の字名は観音山が、段は観音谷がある。国見山の尾根や山裾の名がついているように思われる。

金谷も観音さんが西山にかつてあったこと。これからみて信仰の山ではないかとも思われる。

上比地にみえる観音山や段の観音谷から推して、国見山の山全体が信仰の対象ではないかと思われる。

国見山の名前が付く山は、全国にもみられる。九州の熊本県上村、宮崎県北方町、大分県豊前市にある。

このほか鹿児島県、長崎県、佐賀県、徳島県、高知県、三重県、岐阜県、宮城県、岩手県にもある。これらは県境に位置する山もあり、地形的にも恵まれた山で、いずれも名山のようである。

次に文献からみてみると、奈良時代の『播磨国風土記』、江戸時代の『播磨鑑』、『宍粟郡誌』には国見山の名は見られない。『山崎町史』にも見られない。

絵図には「播磨細見図」、「慶長播磨国絵図」には山の絵がみえるが名は記載されていない。

地元の古老によると、大昔にこの地をおさめた人が国見山から国を眺めたという伝承がある。風土記とも関連する伝承ではないかとも思われるが定かではない。

三、金谷について

金谷の国見山の麓の湯船口の通称成林の古墳から奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡（東京国立博物館蔵）が大正時代に出土している。平城京跡の長屋王邸付近の二条大路北側溝で出土したのと兄弟鏡でももっとも近い貴重な鏡である

金谷からは西北に国見山と東南には揖保川が大きく蛇行しているのがみえる。奈良時代の鏡が出土している他の例と共通する地理的環境である。終末期古墳や奈良時代の鏡が出土したところの地形的特徴は、背後に高い山がつらなり、眼下に大川が蛇行し、平野が広く、見渡すことができる高台の例が多い。奈良時代の鏡を考える上でも国見山は重要な山であると思われる。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-2576 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－7589

『播磨国風土記』の宍粟郡比治村に比定され、里長にみえる山部氏は鏡ともつながりがあるものと思われる。

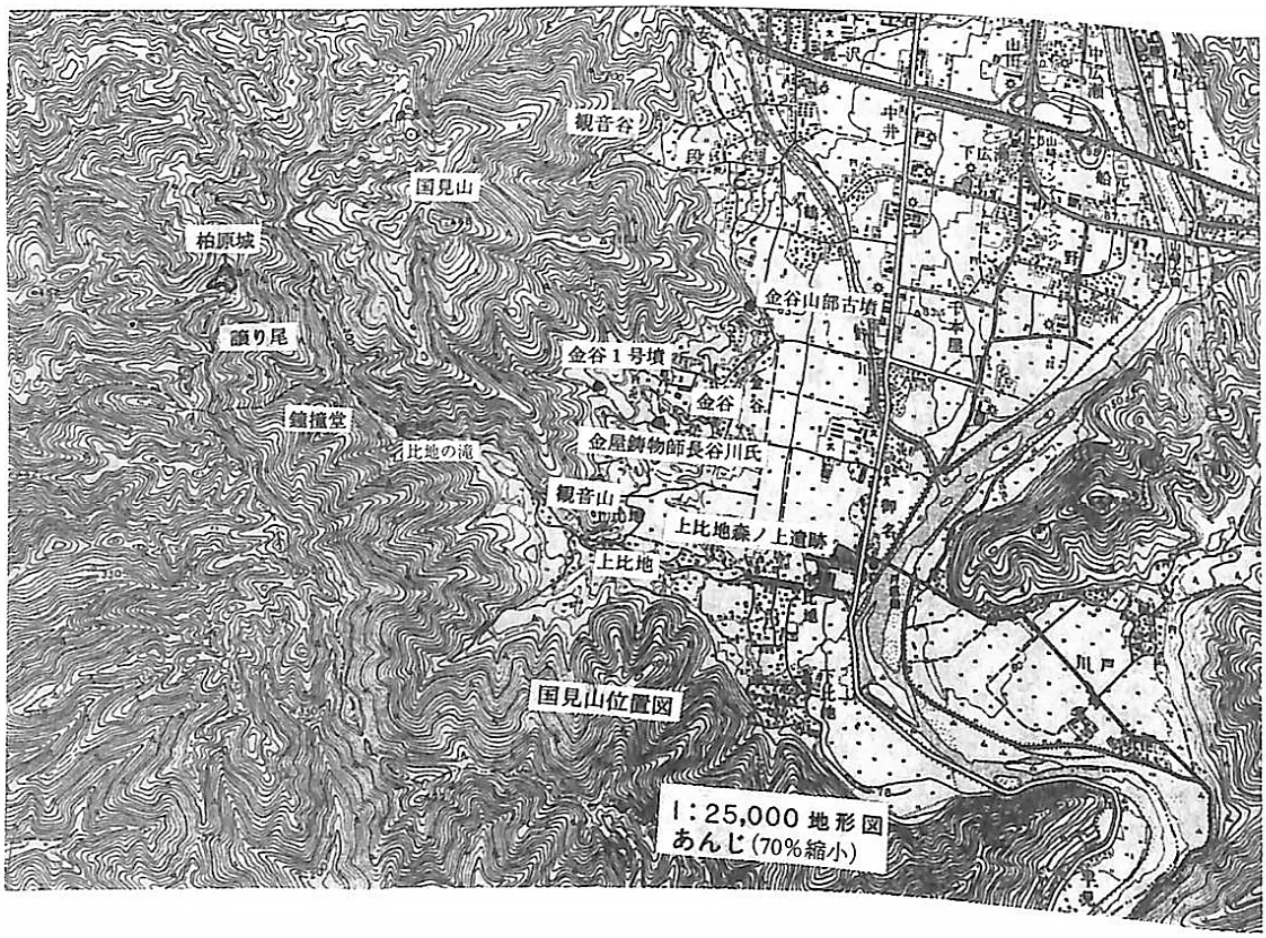
また、西山の譲り尾には柏原城があった。『播備作城記』によると城主は赤松家臣の早瀬帯刀正義、構居は柏原三郎頼宗とされる。観音さんがあり鐘撞堂があった。これらは羽柴秀吉後の豊臣秀吉により、天正八年に焼失されている。

金谷は、江戸時代には「金屋」で、鋳物師から付けられた村である。長谷川孫兵衛、長谷川五郎兵衛がいたことが、桓武伊和神社や小茅野位尾神社、川戸道場元に現存する梵鐘から窺える。

四、おわりに

国見山は山崎町のふるさとのシンボルの山であり、是非とも二十一世紀に残しておきたいふるさとの山である。これまでまったく手が入ってない手つかずの山でもある。そのままの自然環境を次代に伝えることがきわめて重要である。

国見山を良くしていただく開発について、私はおりにふれ見てきたが、国見山の自然をあまくみずに慎重に調査をしていただき熟知して景観を重視したもので、いつもやすらぎのある風景がみられるように、次代に作って良かったとされるものにしていただきたいと願う一人である。



上比地岩田神社の神宝について

片山昭悟

1　はじめに

平成十一年六月二十三日（水曜日）に山崎町立図書館で、上比地の岩田神社前宮総代藤川勉さんが上比地岩田神社に祀られている神鏡について調査してほしいとのことから、六月二十四日の午前十時頃から十一時三十分頃まで図書館において鏡についてお聞きしました。

2　岩田神社前宮総代藤川勉氏のご教示によると、

岩田神社については、江戸時代の元禄十六年（一七〇三）に再建されている。今では榧（かや）の一本堂として知られていた。

地元の伝承によると、岩田氏が寄進したとされる。火事で焼失している。榧は再建時にも再利用されている。正徳二年（一七一六）の鳥居がある。

まず、神鏡は二面で、

1は西村因幡守、2は天下一藤原義信であること。

1は松竹梅と鶴亀の紋様であり柄がついている。

2は蓬莱と銘があり、これも松竹梅の紋様であるとされ、柄がついている。

3　私の事前調査によると、

二面の鏡は江戸時代の柄鏡であること。

作者については、

『東京国立博物館図版図録和鏡篇』東京国立博物館1969の鏡師名寄によると、

1の西村因幡守は「西村因幡守藤原吉重」と「西村因幡守藤原秀定」の二名の鋳鏡師がみられ、西村因幡守のみはみられない。

2は天下一藤原義信がみえる。

中野政樹編『日本の美術　和鏡』至文堂1969鏡師名寄によると天下一藤原義信がみえ、後期とされる鋳鏡師がみられる。

鏡の背面紋様は1が松竹梅、鶴亀もある。2は蓬莱鏡であること。

何れも蓬莱の吉祥紋様であること。江戸時代の後期に多用されていること。

蓬莱は祝儀の具であること。

蓬莱は吉祥紋様の代表で中国古代思想によるもの。

1の類例の鋳鏡師には、西村豊後守政重は宝暦八年（一七五八）の銘があること。

2は天下一藤原義信があること、江戸時代後期とされること。元禄から正徳年間のものがみられる。

なお、一宮町福知の大徳寺の柄鏡は、西村豊後守政重とある。現時点では、鏡の作者の西村因幡守は、京の鋳鏡師であろうと思われる。

天下一藤原義信は、京か、大阪か、江戸かは不明である。

4　岩田神社で観覧させていただいて

六月二十六日（土）午前八時より午前十一時まで、岩田神社で前宮総代の藤川勉氏のご厚意により観覧させていただき、写真撮影ならびに採拓作業、計測をさせていただいた。

岩田神社の神鏡について

1江戸時代　柄鏡「西村因幡守」銘

一尺は三十・三センチ

鏡の径は　十八・三センチ（約六寸）
縁の高さ　〇・三センチ
柄の長さ　十センチ（約三寸）
幅　三・六センチ
厚み　〇・三センチ
重量　六八〇グラム

松竹梅と梅の木近くに二羽の小鳥（鶯か）の紋様である。松は若松である。蓬莱もみえる。

「西村因幡守」銘については、京の鋳鏡師かと推定される。2と比較して小さい。「天下一」が使われてないことから、幕府は天和二年（一六八二）に「天下一」の禁令を出している。それより後になる。径などからみて一七世紀の後半頃と推定される。2より時期的には早いものと思われる。

2「天下一藤原義信作」銘

鏡の径は　二十四センチ（約八寸）
縁の高さ　〇・五センチ
柄の長さ　十センチ
幅　四・三センチ
厚み　〇・二センチ
重量　一一六五グラム

「宝莱」の銘と松竹梅と鶴が一羽飛翔する紋様。松は若松で、梅は岩にある。

大型の蓬莱を主題にした柄鏡であり、ふたたび「天下一」が用いられるようになる。十七世紀後半頃から七寸、八寸の鏡が作られる。八寸の柄鏡であり、江戸時代の十七世紀後半から十八世紀頃かと推定される。

5　神社の鏡について考察すると、

①神のかわりに御霊代や祭料、幣帛として捧げられている鏡。
②神が使う神宝や調度として整えられた鏡。
③社殿のまわりに懸げられた鏡。
④祈願や、成就御礼としての奉納鏡。

などがある。岩田神社の柄鏡もこれらに関連するものと考えられる。

6　おわりに

岩田神社が江戸時代の元禄十六年（一七〇三）に再建されていること。また正徳二年（一七一六）の鳥居があることなどから、一面の「西村因幡守」銘の柄鏡は、六寸鏡で「天下一」がつかわれてないことから天和二年（一六八二）より後の元禄から正徳のころの一七〇〇年代にあたり、岩田神社の再建時に奉納されたのであろうと思われる。一面の「天下一藤原義信」銘の柄鏡は、八寸鏡で大型の柄鏡であり、十七世紀後半から十八世紀頃の江戸時代後期とされる。また、二面があることから合わせ鏡とされていたものであろうか。

二面の鏡は江戸時代の柄鏡であること。何れも蓬莱の吉祥紋様であること。江戸時代の後期に多用されているようである。

六月二十六日（土）早朝より観覧させていただいた。今回の調査で柄鏡背面の紋様、年代、作者などとともに、計測や拓本や写真からほぼ明らかにすることができた。

今後はどのように岩田神社に御神宝として祀られたのか地元で解明をしていただきたい。岩田神社は榧の一本堂として知られることなど柄鏡とともに貴重な江戸時代の資料である。

※　榧　について

『新大字典』講談社によると、

かやの木　ゆえに木偏。

杉に似て材に文彩があり、文木という。

匪ヒは音符

文彩とは、あや。模様。いろどり。

文木とは、役に立つ立派な木。

上比地と岩田神社について

上比地は

奈良時代『播磨国風土記』宍禾郡に　比治里　里長　山部比治

平安時代『和名抄』には比地郷

字森ノ上には通称「ひじごうり」という地名が残っていて小祠が祀られている。

平安時代末　比地荘

室町時代の『看聞日記』によると、嘉吉三年（一四四三）伏見宮家領の荘園であったとされる。比地御所祈保の代官に小河源左衛門が任ぜられている。

文安三年（一四四六）の伏見宮貞成譲状案には、「播磨国衙比地御祈」が記載されている。

岩田神社は、江戸時代の元禄十六年（一七〇三）に再建されている。

鳥居は正徳二年（一七一六）九月作とされる。

榧の一本堂として知られていた。

地元の伝承によると、岩田氏が寄進したもの

氏子は上比地、中比地、金谷

社歴については、記録などに見られず、不詳である。

『兵庫県神社誌』1938による

生谷西垣内遺跡の発掘調査について

山崎町教育委員会

山崎町生谷の字西垣内から東山根において、しそう森林王国拠点エリア生谷整備事業で、水路と連絡道ならびに公園整備がされることになりました。

調査地点は、山崎町生谷字西垣内から字東山根の山裾にかけての一帯で、生谷温泉伊沢の里の県道より北に位置します。

当該地は山崎町埋蔵文化財分布調査によると、弥生時代・古墳時代、奈良時代の生谷第一散布地として知られます。遺跡の概要は、須恵器散布地、集落址の可能性あり。東西二百五十メートル、南北七十メートル、弥生式土器、須恵器、土師器で、現状は水田、宅地、時期は弥生、奈良、平安とされます。また、兵庫県教育委員会の埋蔵文化財分布図にも記載されています。

平成六年から平成七年の発掘調査によると、伊沢の里駐車場にあたる位置で、弥生時代の竪穴式住居址が二棟検出されています。生谷字東山根の山裾には古墳時代後期の横穴式石室の生谷古墳が知られます。周辺には山崎町立山崎東中学校の建設に伴う三津古墳群の発掘調査が行われています。

『播磨国風土記』宍禾郡高家里塩村に比定されます。高家（たかや）の里については、「高家の里。土は下の中。高家と名曰づくる所以は、天の日槍の命（みこと）、告りたまひしく、「この村の高さ、他（あた）し村に勝れ

り」とのりたまひしき。故（か）れ、高家と曰ふ。都太川（つた）。衆人（もろひと）、え称（い）はず。塩の村。処々に鹹（から）き水出ず。故れ、塩の村と曰ふ。牛・馬等、嗜みて飲めり。」とあります。

また、上牧谷には、平安時代の『延喜式』の中に式内社の宍禾七社の一社、大倭物代神社が記載されています。

生谷は蔦沢地区のはじまりの意味があり、小字名には都多郷がみえます。

展望台から、山崎町内はじめ城下地区から河東地区一帯が一望できます。調査区の西垣内には、法師ヶ谷が源流の尺川が蛇行しています。山裾から伊沢川にかけて扇状地にあたり高台に位置します。法師ヶ谷には磐座が祀られています。地図からもここはかつて山崎町の基準としたところのようにも考えられます。

また、調査区からは川戸山や須賀の山、中世の笹ノ丸、長水山、上牧谷の横の山がみえる地です。

生谷字北山根には明治時代に冷泉が湧き出ていることが知られます。

これらのことをふまえて調査は、兵庫県教育委員会の指導のもとに三月より七月にかけて実施しました。事業対象面積は五千平方メートルです。

調査区内に二メートル×二メートルのグリッド（試掘穴）を二十メートル間隔に、道路と水路予定地に十ヶ所と、公園予定地に十八ヶ所設定して、遺構の範囲や時代、遺物を把握するために調査を行いました。

今回の調査で検出した時期は、縄文時代後期、弥生時代中期、弥生時代中期、後期、古墳時代、奈良時代、中世、江戸時代に亘る。

主な遺構は弥生時代中期・後期・古墳時代の竪穴式住居址の一部や可能性があるものは五棟検出しました。

この他溝や柱穴や土坑、江戸時代と推定される尺川の地業で人工的な敷き石を施した遺構など調査区のほぼ全域で遺構を検出しました。

出土遺物は、縄文時代後期の縄文式土器、弥生時代のものは弥生式土器で後期を中心とするものです。なかには中期の畿内Ⅲ様式の坪で口縁の内面には突帯、端部には刻みを施しているものや、竪穴式住居址でⅣ様式の甕で口縁端部に二条の凹線紋を施したものも含まれます。後期は甕、高坏、甑、脚付鉢などです。古墳時代は土師器甕、高坏脚部などです。奈良時代は須恵器蓋と坏が出土しました。江戸時代の遺物は陶磁器が出土しました。

出土遺物は、コンテナ五箱程出土しました。

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052

今回の調査で次のことがわかりました。

1　生谷は縄文時代後期と弥生時代中期から住んでいたことが確認できました。今から約三千年前と二千年前から千八百年前に当たります。

2　弥生時代中期から後期、古墳時代の竪穴住居址がみつかった。弥生時代は径約六メートルの円形です。古墳時代は一辺が約五メートルの隅丸方形です。

3　弥生時代後期、古墳時代の土器が出土しました。広範囲に遺物包含層が認められました。

4　奈良時代にも住んでいたことがわかりました。

5　尺川の氾濫により度々土砂が多量に流れた痕跡があったことがわかりました。

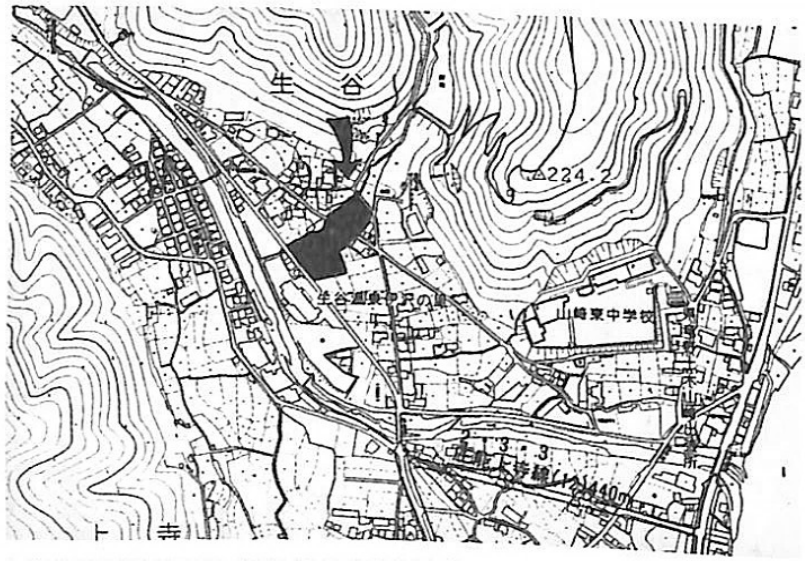
6　集落の中心は、調査区を含めて現集落にかけて広がることが確認できました。

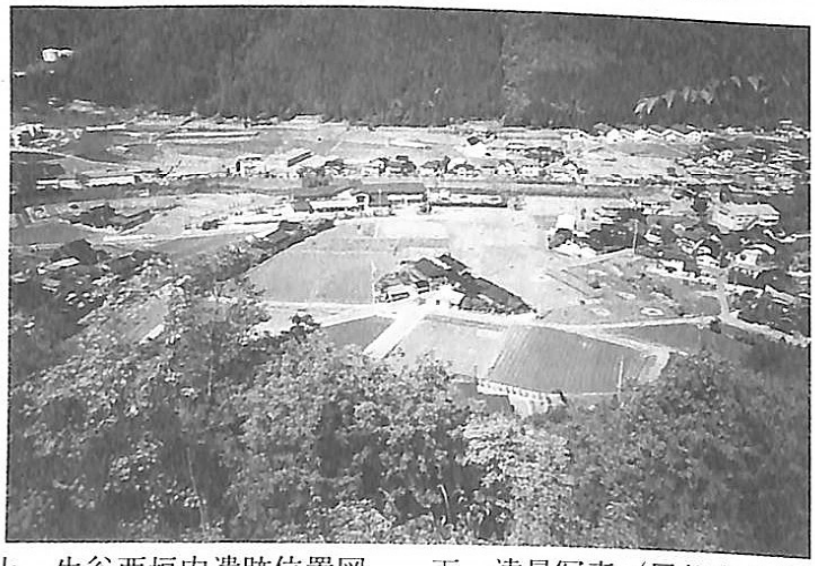
なお、水路と連絡道予定地で遺構を検出したグリッドについては本調査を行い、弥生時代や古墳時代の竪穴式住居址を検出しましたが、記録保存されることになりました。

その他公園予定地の遺構を検出したグリッドについては、遺構は保存されることになりました。

今回は、山崎西中学校によるトライやるウィークによる発掘体験を行いました。参加した生徒は、土器を見つけた喜びと良かったことを感想に書いています。また、地元対象に文化財に関心を持っていただくために調査報告会も行いました。

今後、出土遺物の整理作業で明らかになるものもあり、紹介できればと思っています。





上　生谷西垣内遺跡位置図　　下　遠景写真（展望台より）

寺内町散策と金剛山登山

岸本正理

富田林の地名は、時々耳にしていた。郷土研究会の春の旅行を企画するに当たって私の親友であり郷土研究会の研修部部長であった故垣口正信君が病を隠して私を自宅に招き色々案を練った。その案を二月二十六日役員会に諮り賛同を得て実施の運びとなった。その肝腎の立案者が今はこの世にもういない。痛恨の極みである。

五月二十一日は、残念なことに山崎小学校の運動会、文化協会の春の芸能祭、町の溝そうじ等盛り沢山の行事と重なり、会員の皆さんもその関係で、不本意ながら旅行に参加できなかった方々が多数あったのではなかったかと思われる。結局参加者は三十名止まりであった。

先ず最初富田林市の第二駐車場にバスを止めた。ガイドの松本さんはベテランの方で手落ちなく市役所との交渉、道案内等きっちりこなしてくださった。

寺内町は、大阪市の南郊富田林市の北部にあって、戦国時代から住民の自治によって、即ち一向宗の寺院の境内としてつくられた町である。今回は寺内町のガイドの依頼が出来なかったので旧杉山家の内部だけ案内係の説明を聞くことができた。旧杉山家は、国の重要文化財で、江戸時代造りの酒屋として繁盛した。当時の間取りがそのまま残され、竈の一部や煙を屋外に出すための簀子張りの天井、天井から吊された大きな和紙張りの行灯、能舞台を模して造られた大床の間、その奥には茶室も設けられている。

さらにこの家は、明治のアララギ派の歌人石上露子の生家であり、彼女の好みであろうか和風建築の中に洋風の螺旋階段がしつらえてあった。二階の窓から外を覗くと、幾重にも複雑に入り込んだ重厚な本葺き屋根の造形美は、正に芸術で息をのむほどである。

それから、家並みを見て歩いた。ここは、城門筋と称され、いずれ劣らぬ美しい家並みを持った商家が続く。

次に興正寺別院を訪ねた。丁度十一時から法要が営まれるため黒い礼服を着た人々が三々五々と集まっておられたのにぶつかったが私たちは先に見学をさせてもらった。この寺は、京都興正寺の証秀上人が訪れ荒芝地を銭百貫文で購入、近隣四ヶ村から八人の有力者を集めて、興正寺別院を建立し、八人衆の合議制のもとで御坊を中心とした町づくりが行われた。寺内町は、ここから発祥したのである。

次に、昼食場所の河内長野市花屋亭へ向かった。ここは、丁度観心寺の門前にある。

昼からは、バスの中で会員の皆さんに図り予定を変更して千早赤坂村の金剛山へロープウェイで登ることにした。金剛山は、標高１１１２ｍの険しい山で、さすが楠正成が選んだ要害堅固な山城千早城を建てた所である。ちなみに、千早城は、この山の西の

山腹にある。

頂上からの眺めは、山また山に囲まれ、見通しの良い日には大阪湾の関空が見えるとか、残念ながらそこまでは見通せなかった。山は八重桜や真っ赤なつつじの花で彩られ、すがすがしい空気につつまれて気持ちよかった。

下山して次に、河南町と太子町の境にある大阪府立近つ飛鳥博物館を見学した。中には古代寺院模型や直径10mの仁徳陵古墳の復元模型。また、十四年がかりで保存処理が完了した修羅など多くの資料が展示されていた。ちなみに、「近つ飛鳥」とは、大和飛鳥を「遠つ飛鳥」と呼んだ対語で日本書紀にみえ、当時の都の難波に対しての遠近のことだろう。

ここの見学を最後に帰路に着いた。山崎に着いたのは午後六時三十分、定期バス並みの時間の正確さであった。

神谷村古文書の紹介

史跡部

平成五年に神谷村に「河東地区ふれあいセンター」が完成しました。旧公民館の倉庫を片付けていたとき、長持いっぱいの古文書がでてきました。江戸期から明治初期の貴重な文献で、同自治会では神谷の歴史を物語る大切な資料として保管されています。今回つぎのとおり一覧表で文献の紹介をします。

題名	年号	西暦
播州完粟郡神谷村田方改帳	慶安三年	一六五〇
播州完粟郡神谷村畠方改帳	慶安三年	一六五〇
播州完粟郡神谷村之内長柄村田畠改帳	慶安三年	一六五〇
神谷村畠ヶ田地詰帳	寛文六年	一六六六
三谷外四ヶ村入会山　一礼	元禄十三年	一七〇〇
岸田中川井関取極め断片	元禄十五年	一七〇二
播州完粟郡神谷村山畑改小前帳	正徳六年	一七一六
村高田畠小物成書上帳　控	延享四年	一七四七
寺谷山入相山　一礼	明和六年	一七六九
博奔の儀　一礼	明和八年	一七七一
山出入　乍恐口上	安永七年	一七七八
御条目	寛政九年	一七九七
道論和談済口之事	寛政十三年	一八〇一
持高小物成家数名寄明細帳	文化十年	一八一三
山畑役等銀小物成帳	文政五年	一八二二
播州郡中取締帳	文政十年	一八二七
差入申詫書の事	天保八年	一八三七
田方明細帳	天保十年	一八三九
畑方明細帳	天保十年	一八三九
田畑高小物成家数御改帳	天保十年	一八三九
川奥通船につき乍恐奉差上候御請書	天保十一年	一八四〇

題名	年号	西暦
寺谷山　乍恐御願奉申上候事	天保十四年	一八四三
寺谷山　乍恐書附以願奉申上候事	天保十五年	一八四四
川奥通船につき乍恐奉差上候御請書之事	天保十五年	一八四四
虚無僧取締印書	弘化二年	一八四五
酉定土免之事	嘉永二年	一八四九
虚無僧取締印書	嘉永四年	一八五一
八岡御宮諸用覚帳	嘉永六年	一八五三
人別受取　一礼	安政七年	一八六〇
一礼之事	万延元年	一八六〇
荒神様、御再建入用帳	文久元年	一八六一
乍恐御届奉申上候事	文久三年	一八六三
詫書一礼の事	文久三年	一八六三
詫書一礼の事	元治元年	一八六四
八岡前堂作事覚	慶応二年	一八六六
八岡前堂ぶたい人足控帳	慶応二年	一八六六
神社御改帳　村控	明治四年	一八七一
神社御改帳　ひかへ	明治五年	一八七二
神社御改ニ付書上	明治五年	一八七二
（宮林払下ヶ）御請書	明治九年	一八七六
為取替約定書之事	明治九年	一八七六

古い文書では慶安三年（一六五〇）の検地帳があります。江戸時代を通して何回かの検地が行われており、その初期段階の慶長検地は山崎町内ではまだ見つかっていませんが、慶安の検地帳は野々上村、野村、上牧谷村、上寺村、都多上ノ村、高所村などに残っています。慶安三年といえば、当地に岡山池田氏から備後森恒元が三万石の領主として入封した翌年であります。以来三五〇年保管されてきた貴重な文献です。他の古文書も同じく貴重なものとして今後とも大切に保管されることと思います。また、他地区でも古文書が発見されましたら本会へご連絡をいただければありがたく存じます。